

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
4 1	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol and the risk of colon and rectal cancer with mutations in the K-ras gene. アルコールと K-ras 遺伝子変異のある結腸直腸がんのリスク	
執筆者	
Bongaerts BW, de Goeij AF, van den Brandt PA, Weijenberg MP.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol. 2006 Apr;38(3):147-54.	
キーワード	
アルコール、結腸直腸がん、K-ras 変異、コホート研究、オランダ	
要 旨	
<p>背景と目的： アルコール摂取が疾病と関連があることは良く知られているが、アルコール自体に発がん性があるというよりはアルコールの代謝過程に問題があることが報告されている。そこでアルコール摂取と結腸直腸がんにおける癌遺伝子であるの変異の危険度の増加およびビール摂取と K-ras 遺伝子の G(グアニン)から A (アデニン) の変異の増加との関係を検討した。</p> <p>方法： 1986 年に開始された 55 歳から 69 歳の男女 120,852 人を対象としたオランダの食事と癌に関する大規模コホート研究の参加者の中から、全コホートからの任意抽出者集団 4076 人と全追跡期間 7.3 年間のうち、最初の 2.3 年間の除外しそれ以降の新規の結腸がん発症者 428 人と直腸がん発症者 150 人との間でアルコール摂取と K-ras 突然変異との関係をコックス比例ハザードモデルを用いて検討した。</p> <p>結果： 一日 30g 以上のアルコール飲酒者は男女とも結腸大腸がんの危険度が増したが K-ras 変異の有無とは無関係だった。アルコール摂取とは独立してリキュールの摂取は、リキュール以外の摂取と比べて 2.25 (95%信頼区間; 1.0-5.0) 倍、野生型 K-ras 遺伝子の直腸がんの危険が増加した。ビール摂取と G-A 変異による結腸大腸がん発症との関係は男性で明確には認められなかった。女性ではビール摂取が少ないために比較できなかった。</p> <p>結論： アルコール摂取と結腸直腸がんの K-ras 遺伝子変異とは有意な関係があるとは認められなかった。また、ビール摂取と K-ras 遺伝子 G→A 変異には関係が認められなかった。</p>	